

在日クルド人第二世代の女子の進学と将来像
—埼玉県川口市の日本語教室でのフィールドワーク調査より—

日本国内の在留外国人数は年々増加し、出身国や在留資格の多様化も進んでいる。入管法改正法の施行によって、難民認定申請中でも強制送還が可能になるなど、非正規滞在者への姿勢は厳しくなっている。在日クルド人は、仮放免という状況で暮らす人が多く、不安定な立場にある。在日クルド人は、1990年代初頭に男性が就労目的で入国するとともに、トルコでの迫害を受けているとして、日本で難民認定申請を行っている。時代の流れと共に、家族の呼び寄せや定住化が進み、世代を重ねている。日本での学校経験や将来像を描くにあたって、進学という新たな局面で課題が積み重なっていくことが推測できる。

先行研究では、日系ブラジル人や、インドシナ難民、中国帰国者が対象となることが多く、難民に近い出自があるクルド人が対象となることは少なかった。また、移民第二世代の問題としてよく論じられてきたのは、言語習得や教科学習、学校経験による負の経験、文化変容、アイデンティティ形成、世代間での違いである。その際に男女に注目されることは少なく、また、どのように問題を乗り越えてきたのかを明らかにされることが少なかった。

これらの先行研究を踏まえて、在日クルド人という在留資格が不安定な立場で、必然的にマイノリティになりやすい女子の進学と将来をテーマにした。そして、在日クルド人第二世代の女子は、複数の問題や価値観を抱えながらどのような将来像を描き、進学を目指すのかという問いを設定し、日本語習得や教科学習、価値観、在留資格という3つの壁があるのではないかという仮説を立てて研究を行った。これらを明らかにするため、埼玉県川口市にあるクルド人向けの日本語教室に2023年9月から約1年半、筆者がボランティアとして通い、参与観察を行った。信頼関係を構築した上で、主宰者とクルド人の女子高生にインタビュー調査やアンケート調査を行ったり、家庭訪問に行ったりしてフィールドワーク調査を行った。

調査を通じて明らかになったのは、日本語学習や教科学習の壁を乗り越えるためには高度な日本語が必要であると彼女たち自身が気づき、自らの学習に対する姿勢を積極的に変え、努力を重ねてきたということである。また、日本とトルコの規範の板挟みになりながらも、これまでの経験を将来像に結びつけて未来を紡ぎ、価値観の壁を乗り越えようとしている。コミュニティにおける繋がりや支えとなる一方で、彼女たちが葛藤を生むこともあるが、対話によって打開策を見出してきたことが明らかになった。そして、在留資格の壁によって、進学先の選択肢が制限されたり、経済的負担がのしかかっていたりしていることが明らかになるとともに、前向きに行動していることが分かった。これらの調査からは、彼女たちは進学と将来を描くなかで、仮説で立てた3つの壁に直面しながらも、クルド人コミュニティにおける先駆者的な存在として、未来を切り拓いていこうとしていることが明らかになった。